



## 「ひとなる」～ひとはつくるものではなく、なるもの～

園長 野中 泉

私がいる事務室の向かい側は、ホールです。ホールのテラス側は一面窓になっているので、11月から昼寝をしなくなったみかん組さんが、ここで給食を食べ、その後室内遊びで過ごす様子がよく見えます。楽しそうに友達とおしゃべりしながら給食を食べている姿や、同じ空間にいる大人（たいがいは日報を書いている担任ですが）の存在を気にもとめない様子で思い思いの仲間と、好き勝手に遊んでいるその様子は、どんなに見ていても見飽きません。他のクラスの子たちがお昼寝をしている2時間もの長い時間を、「次は何すればいいの？」と大人に問うこともなく、自分たちで仲間を見つけ、遊びを作り出し、順番を決めたり、けんかを解決したりしているその姿に、私は毎回のように「ああ、大きくなるってこういうことだ」と感動し、足を止めその光景にしばらく見惚れてしまうのです。

0歳児から5歳児までが共に生活する場である保育園は、まさに「育つ」というのはどういうことかを目の当たりにする場でもあります。もちろん生活の場である保育園では、私たち大人が子どもに教えることも少なくありません。例えばトイレで排泄をすることや、ごはんをスプーンやお箸をつかって食べること。歯磨きやお片付け、着替えや手洗いなどなど。でもずいぶんたくさんあるように思える大人が教えることは、実は子ども自身が持っている内なる力（発達）がもたらす「育ち」に比べたらごくごくわずかであることも、ここにいるとしっかりとわかるのです。寝ていた赤ちゃんがハイハイをして立ち上がり歩き出す。泣くことでしか自分を表現できなかった子が、言葉を獲得し自分自身のことを言葉を使って表現できるようになる。自分のことしか考えられなかった心が、友だちの思いまでもに気づきはじめる。当たり前だけれど奇跡のようでもあるその発達の力は、誰かに「与えられた」ものではなく、どの子にも「自身の内なる力」として備わっていたものなのです。そしてもっとすごいことだと思うのは、子どもたちは誰に教えられたわけでもないのに、その力の大半を「遊び」の中で自ら育てているのです。

私はスウェーデンのA・リンドグレンという人が書いた児童書「やかまし村」シリーズが子どもの頃から大好きなのですが、そこに出てくるラッセというとてもいいはずの子が小学校の入学時になっても教室でじっと座ってられないのを見た先生が「あなたはまだ学校適齢期じゃないわね。学校に来る前にもう少し遊んでおく必要があるのよ。来年またいらしゃい」と言う場面があります。その後、ラッセは弟や妹たちと一緒に学年で元気に学校生活を送るのですが、小学生の私はとくに気にもとめなかったこのことが、実は、深い子ども理解に支えられた描写であることに今になって気づきます。（同時にそんなふうな「待つこと」が途方もなく難しい現代の日本の学校教育のあり方も考えずにはいられません）。

題名にさせてもらったのは、一昨年末に100歳で亡くなられた著名な教育学者太田暁先生の言葉です。「ひとは自動車やコンピューターのようにつくられるものではない。青いりんごが陽の光をたくさん吸収し赤く色づくように、青虫が緑の葉の栄養を食べて、さなぎから鮮やかな蝶になるように、子どもたちは生来持っている力で『ひと』になっていく。大人は、一人ひとりが個性を生かして育っていく過程を豊かにするために（水をやり土を耕すように）その手助けをすればよいのだ」。生前太田先生が穏やかに、でもとてもきっぱりとそう語られていたことを思い出します。もうすぐ卒園を迎えるみかん組さんへ、アトムで重ねた日々が、これからも彼らの「ひとなる」時間を応援してくれることを信じ卒園へのお祝いの言葉にかえます。